

介護老人保健施設しおさい

症例概要	ご利用者	: 60代・男性・要介護2
	利用期間	: 令和2年～通所リハ利用
	病名	: 脳血管性パーキンソニズム
	既往歴	: 脳梗塞（右麻痺）、高血圧症、糖尿病
	経過	: 母と二人暮らし。通所、ショートステイ両方当施設を利用されている。コーヒーの話題で盛り上がった際ご本人から出た「今度淹れてあげるよ」の一言。しかし、身体的な不安から、その夢の実現をためらっていました。「自分のスキルで人を喜ばせたい」という内なる自信と意欲を再燃させ、リハビリと趣味の融合、そして目標設定による自己肯定感の向上は、ご本人のコミュニケーションを活発化させ、生活全体に大きな活力をもたらした症例。

内 容

かつて、たまごサンドが自慢の喫茶店を営む両親の背中を見て育ち、横浜の老舗で腕を磨いた一人の職人がいました。しかし、当施設を利用し始めた頃のご本人は、その面影もないほど意気消沈されていました。「ヤカンを持ってない」「もう立ってられない」。病や加齢による身体的変化は、長年培った職人の誇りを「諦め」へと変え、自ら動くことのない静かな日々を送られていたのです。

転機は、ショートステイ中に看護職へふと漏らした「今度、美味しい珈琲を淹れてあげるよ」という一言でした。この微かな意欲の兆しを受け取った看護職は、すぐさま通所職員へ報告。通所部署内ですぐさま共有され、「この言葉を形にしたい」という熱意が多職種連携を動かし始めました。

まず相談を受けたリハビリ職は、単なる筋力訓練ではなく、「注湯動作」を徹底的に分析しました。ヤカンを支えるための体幹の安定、細く一定の湯量を保つ手首の固定など、リハビリを「職人の所作」の再構築としてプログラム化。並行して介護職は、道具選びから「ホットが美味しい季節」というご本人のこだわりを徹底的にヒアリングしました。スタッフ全員で「あなたの淹れた珈琲が飲みたい」と声をかけ続け、孤独な諦めを「期待される喜び」へと塗り替えていったのです。

また、職員を通じてこの計画を知ったご家族も、「息子がやる気になったなら」と、かつて愛用していた愛着のある道具を快く提供してくださいました。周囲の期待と道具が揃うにつれ、ご本人の目にはプロの矜持が宿り始めました。

11月後半。自ら「特別チケット」を作成するその表情に、かつての暗い影はありませんでした。当日、全神経を集中させて淹れられた「究極の一杯」は、ご本人自身が「自分はまだ誰かを笑顔にすることがで

きる」と確信するキラキラとした瞬間となりました。

「機能回復」というリハビリを「社会的な役割」へと変えたことで、ご本人は今、かつての活気を取り戻され、「次はどんな豆がいいかな」と語るその笑顔は、次なる一杯に向けて輝かしい日々を歩まれています。

～多職種の関わり～

【ホーム長】過去に喫茶店に行った事などを伝え励ましに貢献。

【連携室】送迎等での関りから、声掛けを実施。

【看護師】ご本人より珈琲についての話を引き出し、その後も声掛けを実施。

【通所介護職員】日常動作時の声かけ支援と日々のリハビリ、珈琲を入れる際の補助実施。

【リハビリ】基本動作の練習を継続的に実施。自主トレーニング指導、介助法を指導